

【研究論文】

音楽の印象に対する聴取方略と
音楽経験の相互作用
— 選択的聴取と全体的聴取の比較 —

後 藤 靖 宏

研究論文

音楽の印象に対する聴取方略と音楽経験の相互作用 —— 選択的聴取と全体的聴取の比較 ——

後藤 靖 宏

Yasuhiro Goro

目次

1. はじめに
2. 予備調査
3. 本実験
4. 結果
5. 考察
6. 謝辞
7. 引用文献

[Abstract]

Interaction of Listening Strategies and Musical Experience on Impressions of Music: A Comparison of Selective and Holistic Listening

We compared whether the impression of a piece of music differs between intentional selective listening and unintentional overall listening in terms of musical experience. Using the affective value scale of music (AVSM) as the dependent variable, the study observed differences between the impressions of intentional selective and unintentional overall listening for inexperienced listeners. Furthermore, the study compared impressions after selective listening between experienced and inexperienced listeners and found that the experienced listeners provided higher ratings for the impressions of the music. However, we noted few differences between experienced and inexperienced listeners after unintentional overall listening. These results suggested a similarity between the impressions of experienced listeners about intentional selective and unintentional overall listening. Moreover, the results indicated that experienced listeners may process unintentional overall listening as well as intentional selective listening.

はじめに

音楽経験は、学校での音楽教育による経験と、学校以外での音楽活動による経験の2つに大別される。学校での音楽教育による経験は、基本的に、同学年で同じ内容を学び、音楽経験は平等に積み重ねられるものである。一方、学校での音楽教育以外の音楽経験には経験期間の違いによる個人差があり、身に付く音楽能力にも個人差がみられる。一般的に、

経験者は非経験者と比べ、総じて音楽能力が高いと言われている。

音楽経験と音楽能力との関係性を扱った研究は、今までに数多く行われてきた。大浦(1996)や土井(2002)では、意図的に音量を変化させた演奏に対して演奏の良さを評定させた結果、経験者は非経験者と比べ、評定の安定性及び一貫性が高いことが示された。また、田中(1994, 1996)によると、同時に示された2つの音の音程を分類する課題において、

キーワード：選択的聴取, 全体的聴取, 音楽経験, 音楽の印象, 感情価(AVSM).

Key words: selective listening; overall listening; musical experience; musical impression; AVSM

音楽経験歴の長い者ほど成績が高いことが示されている。さらに、メロディ認知における音高の知覚(後藤, 2009)や拍節構造の認知(後藤, 2017)においても音楽経験の影響が確認されている。

田中(1997)によると、学校の授業以外での音楽経験が無い、あるいは音楽経験の浅い者が音楽を認知する際、音楽を正確に和音や旋律などの要素に分析することはできないという。このことは、音楽認知は音楽経験を積み重ねることにより、音楽全体を漠然と聴いている状態から、和音や旋律などの構成要素を認知する分析的な処理が可能になるように、次第に変化していくことを示していると考えられる。

音楽を分析的に認知できるというこのような能力は、実際に演奏したり、演奏の技術を審査したりする場面では有効に働く。しかし、音楽作品を味わうことを目的とした鑑賞の場面などでは、必ずしもこの能力が有効であるとは限らない。その理由は、音楽経験の積み重ねによって身に付いた分析的処理能力が、音楽作品全体を味わう際に何らかの影響を与えてしまう可能性があるからである。

そこで本研究では、音楽経験者が意識的に音楽を分析的に認知する場合と、特定の意図を持たず、いわば音楽を全体的に認知する場合とで、音楽から受ける印象に違いがみられるかどうかを調べることを目的とする。本研究では、このことについて「選択的聴取(selective listening)」を応用した方法によって調べた。

具体的には、演奏された複数の楽器の音の中から、ある特定の1種類の楽器の音を選択的に聴くように指示した場合と、特に聴き方の指定はせずに音楽を聴くように指示した場合とを比較した。以降、前者を選択的聴取、後者を全体的聴取と呼ぶことにする。

さて、本研究では、両者の違いを、聴取した曲の印象の違いによって調べた。松本・小杉・石田(2001)によれば、曲の聴取前に誘導された気分によって聴取する曲の印象が変わる傾向がみられるという。また、下迫・菊地(2000)では、全体的聴取と、特定の高さの音を数えさせる分析的聴取をさせ、それぞれの曲の印象を調べたところ、分析的聴取では曲の印象が低く評定されるという結果が得られた。これらのことは、曲の印象は聴取者の聴取する際の状況、注意を向けて聴いていたものや聴取時の気分などの影響を受け、結果が変化することを示していると言える。以上のような知見をふまえると、異なる聴取方法によって楽曲を聴取した後の印象を比較することで、両者の間の差異を検出できる可能性があると考えられる。

曲の聴取印象の評定には、谷口(1995)による音楽作品の感情価評定尺度(Affective Value Scale of Music, 以下“AVSM”と記す)を用いた(表1)。AVSMは「高揚」、「親和」、「強さ」、「軽さ」、「荘重」の5尺度から成り、それぞれ4~8項目の形容語から構成される。単極5段階で形容語の評定を行い、それぞれ尺度別に集計されたものが聴取した曲の印象と

表1. AVSM の尺度と項目

感情価尺度	評定項目
高揚	沈んだ, 哀れな, 悲しい, 暗い, 陽気な ⁺ , うれしい ⁺ , 楽しい ⁺ , 明るい ⁺
親和	優しい, いとしい, 恋しい, おだやかな
強さ	強い, 猛烈な, 刺激的な, 断固とした
軽さ	気まぐれな, 浮かれた, 軽い, 落ち着きのない
荘重	厳粛な, おごそかな, 嵩高な, 気高い

⁺逆転項目。

して表されることになる。

予備調査

本実験において使用する曲を選定するため予備調査を行った。具体的には、特定の楽曲による印象の偏りを防ぐため、谷口(1995)による AVSM を用いて評定させた。各尺度から平均得点が最も高かった曲を1曲ずつ、計5曲選曲した。

方法

実験参加者 北星学園大学の学生9名が調査に参加した。平均年齢は20.67歳であった。実験参加者の音楽経験年数は問わなかった。

材料 吹奏楽曲を使用した。曲は市販のCDから、演奏時間が3分未満のものを選んだ。さらにその中から、曲調が似ていると感じられた曲を省き、11曲を選曲した(表2)。

質問紙 各形容語の右隣に単極5段階の評定スケールを配置した。評定スケールの上部には(1)から(5)までの数字を配置し、「全く当てはまらない」、「よく当てはまる」という形容語を記した。ページ上部には、曲を聴いて当てはまると感じた形容語の度合いを評定

スケールに記入するように教示を記した。ページ下部には、評定が終了次第、次のページを開くよう教示を記し、1曲ごとの回答は実験参加者のペースによって行わせた。評定スケールを載せた質問紙の他に学科、年齢、性別の記入欄、調査の流れを教示を記載した表紙を1枚併せて回答用紙とした。

手続き 調査は呈示材料以外の雑音がしない静かな部屋で行った。始めの5曲は9名同時に行った。残り6曲は7名と2名に分けて行った。調査は、1曲の聴取が終了するたびに、曲の印象を評定させ、これを11曲分繰り返し行わせた。1曲の聴取が終了するたび、全ての実験参加者が回答を終えたことを確認してから次曲の呈示を行った。

結果と考察

実験参加者9名のデータを分析対象とした。各曲の AVSM の各尺度における評定項目の平均評定値を、尺度の評定得点として算出した。高揚尺度内の4つ(「陽気な」、「うれしい」、「楽しい」、「明るい」)は逆転項目として扱い、通常項目4つ(「沈んだ」、「哀れな」、「悲しい」、「暗い」)の平均評定値と合計した。そして、他尺度と得点範囲を等しくするために1/2にし

表2. 予備調査使用曲と5尺度平均評定値

曲順	曲名	高揚尺度	親和尺度	強さ尺度	軽さ尺度	荘重尺度
1	I. ホー・ダウン*	5.06	9.88	12.25	16.38	8.63
2	行進曲 剣と槍*	7.75	10.5	12.5	8.5	14.5
3	I. ラ・ラグーナ・デル・シンベ*	17.13	5.5	14.38	6.25	14.5
4	II. Part II*	10.38	16.5	7.63	7.25	11.13
5	Tom Sawyer	7.56	10.25	11.5	11.25	10.13
6	ピカドレー	6.94	9	12.5	11.25	11.5
7	Becky Thatcher	13.75	14.88	7.5	5.63	13.63
8	III. グァラチャ	7.19	10.88	9	14.63	8.5
9	II. Vivace	9.38	9.88	10.75	8.5	12.13
10	IV. ケートゥアへ*	14.88	5.25	16	8.25	14.25
11	ゆかいな仲間の行進曲	6.5	9	12.75	10.38	10.63

*本実験で使用された曲

た。予備調査の結果、得られた各曲における AVSM の各尺度の評定得点を表2に示した。

この結果から、5尺度のそれぞれにおいて最も高い評定得点が得られた「第5組曲—インターナショナル・ダンスより I. ホー・ダウン」, 「行進曲 剣と槍」, 「アマゾニアより I ラ・ラゲーナ・デル・シンベ」, 「プスタ〜4つのロマの舞曲より II. パートII」, 「アマゾニアより IV. ケトゥアへ」の計5曲を本実験の使用曲に決定した。

本実験

音楽経験者と非経験者を、演奏された複数の楽器の音の中から1種類の楽器の音を選択的に聴かせる選択的聴取群と、特に聴き方の指定はせずに音楽を聴かせる全体的聴取群に分け、聴取した曲の印象に違いがみられるのかどうかを検討した。

方法

実験参加者 音楽経験者群として、北星学園大学吹奏楽部に所属する大学生28名、非経験者群として、吹奏楽やオーケストラ経験のない北星学園大学の大学生28名が実験に参加した。

音楽経験者群における担当楽器とその内訳は、クラリネット6名、サクソフォーン6名、トランペット6名、トロンボーン6名、チューバ4名であり、平均楽器経験年数は6.21年であった。音楽経験者群、非経験者群を合わせた実験参加者全体での平均年齢は20.8歳であった。

音楽経験者群、非経験者群ともに半数の14名ずつを選択的聴取群と全体的聴取群に分けた。音楽経験者群においては担当楽器が同じ経験者内で半数ずつに分けた。

実験計画 AVSM を従属変数とする2要因2水準であった。第一の要因は音楽経験の有無(音楽経験者/非経験者)であり、第二の要因

は聴取態度(選択的聴取/全体的聴取)であった。どちらも実験参加者間要因とした。

装置 材料の呈示にはPanasonic製のNV-VP50SのDVD/CD-Playerを使用し、実験場所に備え付けのスピーカーを用いた。

材料 選択的聴取群、全体的聴取群ともに、予備調査において選出した吹奏楽曲「第5組曲—インターナショナル・ダンスより I. ホー・ダウン」, 「行進曲 剣と槍」, 「アマゾニアより I ラ・ラゲーナ・デル・シンベ」, 「プスタ〜4つのロマの舞曲より II. パートII」, 「アマゾニアより IV. ケトゥアへ」の5曲を使用した(表2)。曲の呈示順はラテン方格法を用い、5つのランダムパターンを作成した。また、選択的聴取群に対し、選択的に聴かせる楽器の音を具体的に呈示するため、各楽器の音が顕著な曲を実験者の判断で用意した(表3)。

練習試行用の音楽材料として「TOMSAWYER SUITE より Tom Sawyer」を使用した。選択的聴取群は各楽器ごとに曲順を固定し、意図して選択的に聴かせる楽器の曲を、練習試行と本試行の前に毎回呈示した。

質問紙 谷口(1995)による AVSM を用いた。尺度内での評定項目の並列順序と質問紙内での尺度の並列順序は、ともにラテン方格法を用いて4つのランダムパターンを作成した。質問紙は1曲につき2枚からなり、1枚目には聴取した曲の印象の評定のための24項目の形容語を記載した。形容語の隣の評定スケールを1から5までの数字で記載し、1と5の

表3. 選択的聴取群で音色の例示に使用した曲

対象楽器	曲名	作(編)曲者
クラリネット	3つのロマンス	シューマン
サクソフォーン	ソナタ(アダージョ)	ウォーリー
トランペット	ベニスの謝肉祭	デイヴィス
トロンボーン	ソナチネ	ボザ
チューバ	チャールダーシュ	モンティ

上部に「全く当てはまらない」、「よく当てはまる」という形容語を記した。2枚目には聴取した曲に関する既知性への質問事項として問2、問3を記載した。問2は、楽曲を知っているかを調べるために、「まったく知らない」、「多分聴いたことはないと思う」、「一度くらい聴いたことはある」、「何度か聴いたことがある」、「よく聴く/聴いていた」の5つの中から選択させた。問3では曲の演奏経験を尋ねた。

これらの質問紙を5曲分作成し、1曲目の前には手順を図示したものと、印象を評定させる際の練習用ページを挿んだ。5曲目の次ページには実験参加者の学校の授業以外での楽器経験を問う質問と、その質問への回答を記入する欄を設けた。

選択的聴取群ではこの回答用紙の問3の後に問4、問5を設けた。問4は選択的聴取を行うことを意識していたかどうかを確かめる質問であり、「はい」、「いいえ」の2択で選択させた。問5には2つの目的があった。1つは確実に選択的聴取を行っていたかどうかを確認するというスクリーニングを行う目的であった。もう1つは、経験者と非経験者間での選択的聴取を行う際の確信度を比較する目的であった。問5は選択的聴取を行うことを意識していたと回答した実験参加者のみを対象とし、選択的聴取ができたと思う確信度を、1(全く自信がない)から5(とても自信がある)の5件法で回答させた。

手続き 実験は、呈示材料が良く聴こえる静かな教室にて行った。選択的聴取群では割り当てた楽器ごとに行った。1回につき1~4名のグループで行い、曲の呈示は快適聴取レベルとした。

曲を呈示して聴取させ、曲が終了した後で回答用紙に聴取した曲の印象を評定させた。これを1試行とした。実験に際し、曲の呈示が終了してから回答を開始すること、回答用紙1~2枚目への回答が終了した後はそのまま待つように教示した。

選択的聴取群には、呈示された楽曲の中から、先に呈示された特定の楽器の音を判別する手がかりとして、その楽器の音のみを聴き取らせるようにするために「今から○○(選択的に聴かせる楽器の名前)の音に注意しながら曲を聴いてもらいます。まず、○○の音がどのような音なのか聴いてください」と教示を与えた。教示後、意識して選択的に聴かせる楽器の曲を30秒ほど呈示した。その呈示後、「次に印象を評定していただく曲を聴いてもらいます。先ほど聴いた○○の音に注意しながら聴いてください」と教示を与え、曲を呈示した。曲が終了した後、「今聴いた曲の印象として、当てはまると思うところに丸をつけてください」と教示を与え、回答用紙に曲の印象を評定させた。これらを1試行とした。

全体的聴取群には、特定の楽器を聴くようにという教示は与えず、始めから「今から印象を評定していただく曲を聴いてもらいます」と教示した。教示後、楽曲を呈示し、「今聴いた曲の印象として、当てはまると思うところに丸をつけてください」と教示を与えた。

練習試行として、選択的聴取群、全体的聴取群の両方において練習試行用の曲を30秒ほど呈示し、回答を行わせた。実験参加者に実験の流れを確認させた後で本試行に入り、上の手順で計5試行を繰り返した。1試行ごとに全実験参加者が回答を終えたことを確認した後に次の試行へと移った。

実験にかかった時間は選択的聴取群、全体的聴取群とともに約30分であった。

結果

経験者28名、非経験者28名のデータを分析の対象とした。その際、本実験の本試行で使用した曲5曲のうち、4曲目の「プスタ~4つのロマの舞曲より II. パートII」において、経験者群内で演奏経験者が複数いたことが判明

したため、この曲のデータを分析の対象から省いた。各曲の AVSM の各尺度における項目の平均評定値を尺度の評定得点として算出した。

AVSM の尺度ごとに楽器経験要因と聴取態度要因における尺度の評定得点について、繰り返しのある分散分析を行った。有意差あるいは有意傾向が観察されたものを図1～図10に示す。

図1には4曲を込みにした結果を示す。各尺度に対して分散分析を行った結果、楽器経験における主効果は、強さにおいて有意傾向がみられた($F[1, 224] = 3.76, p = .05$)。そのほかの尺度において、主効果はみられなかった(高揚: $F[1, 224] = 0.17, n.s.$; 親和: $F[1, 224] = 0.71, n.s.$; 軽さ: $F[1, 224] = 0.00, n.s.$; 荘重: $F[1, 224] = 1.74, n.s.$)。聴取態度における主効果は、強さにおいて主効果が確認された($F[1, 224] = 4.61, p < .05$)。そのほかの尺度において、主効果はみられなかった(高揚: $F[1, 224] = 0.02, n.s.$; 親和: $F[1, 224] = 0.28, n.s.$; 軽さ: $F[1, 224] = 0.06, n.s.$; 荘重: $F[1, 224] = 0.00, n.s.$)。楽器経験と聴取態度の交互作用については、強さにおいて主効果の有意傾向がみられた($F[1, 224] = 2.12, p = .15$)。その他の尺度において、主効果はみられなかった(高揚: $F[1, 224] = 0.07, n.s.$; 親和: $F[1, 224] = 0.58, n.s.$; 軽さ: $F[1, 224] = 0.32, n.s.$; 荘重: $F[1, 224] = 1.74, n.s.$)。強さにおいて、Bonferroni法による単純主効果の検定を行ったところ、全体的聴取において経験者($M = 13.14$)と非経験者($M = 11.38$)間との交互作用がみられた($p < .05$)。また、非経験者の選択的聴取($M = 13.25$)と全体的聴取($M = 11.38$)において単純主効果がみられた($p < .05$)。

次に各曲ごとと同様の分析を行った。まず1曲目では、楽器経験における主効果はすべての尺度において確認されなかった(高揚: $F[1, 52] = 0.23, n.s.$; 親和: $F[1, 52] = 0.11, n.s.$; 強さ: $F[1, 52] = 1.18, n.s.$; 軽さ: $F[1, 52] = 0.81, n.s.$; 荘重: $F[1, 52] = 0.32, n.s.$)。聴

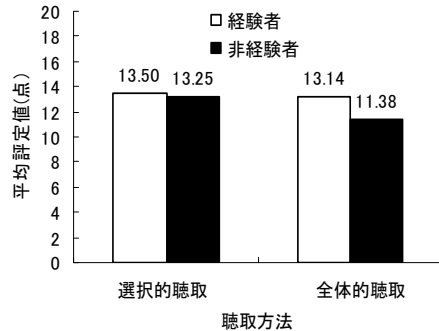


図1. 4曲合計「強さ」の平均評定値

取態度においては、強さ(図2)、軽さ(図3)の各尺度において主効果の有意傾向がみられた(強さ: $F[1, 52] = 2.87, p = .09$; 軽さ: $F[1, 52] = 3.53, p = .07$)。その他の尺度において、主効果はみられなかった(高揚: $F[1, 52] = 0.48, n.s.$; 親和: $F[1, 52] = 0.11, n.s.$; 荘重: $F[1, 52] = 0.00, n.s.$)。楽器経験と聴取態度の交互作用については、すべての尺度において確認されなかった(高揚: $F[1, 52] = 0.16, n.s.$; 親和: $F[1, 52] = 1.03, n.s.$; 強さ: $F[1, 52] = 0.68, n.s.$; 軽さ: $F[1, 52] = 0.20, n.s.$; 荘重: $F[1, 52] = 0.24, n.s.$)。次に、聴取態度において有意傾向がみられた強さと軽さについて、Bonferroni法による単純主効果の検定を行った。強さにおいて、非経験者において選択的聴取($M = 11.07$)と全体的聴取($M = 9.00$)の間に単純主効果の有意傾向がみられた($p = .08$)。軽さでは、非経験者において選択的聴取($M = 16.00$)と全体的聴取($M = 13.79$)の間に単純主効果の有意傾向がみられた($p = .11$)。

次に2曲目では、楽器経験における主効果は、すべての尺度において確認されなかった(高揚: $F[1, 52] = 0.11, n.s.$; 親和: $F[1, 52] = 1.37, n.s.$; 強さ: $F[1, 52] = 0.01, n.s.$; 軽さ: $F[1, 52] = 2.32, n.s.$; 荘重: $F[1, 52] = 1.87, n.s.$)。聴取態度については、高揚(図4)においてのみ主効果の有意傾向がみられた($F[1, 52] = 2.94, p = .09$)。その他の尺度において、

主効果はみられなかった(親和: $F[1, 52] = 0.79, n.s.$; 強さ: $F[1, 52] = 0.32, n.s.$; 軽さ: $F[1, 52] = 0.17, n.s.$; 荘重: $F[1, 52] = 0.28, n.s.$)。楽器経験と聴取態度の交互作用については、軽さ(図5)において楽器経験と聴取態度の交互作用がみられた($F[1, 52] = 4.32, p < .05$)。その他の尺度においては交互作用はみられなかった(高揚: $F[1, 52] = 0.06, n.s.$; 親和: $F[1, 52] = 0.63, n.s.$; 強さ: $F[1, 52] = 0.03, n.s.$; 荘重: $F[1, 52] = 0.98, n.s.$)。次に、聴取態度について主効果の有意傾向がみられた高揚においては、経験者の選択的聴取($M = 5.82$)と全体的聴取($M = 7.07$)、非経験者の選択的聴取($M = 5.89$)と全体的聴取($M = 7.57$)の間にも単純主効果はみられなかった。楽器経験と聴取態度の交互作用がみられた軽さでは、選択的聴取において経験者($M = 9.29$)と非経験者($M = 6.50$)の間に有意な差がみられた($p < .05$)。さらに、非経験者において選択的聴取($M = 6.50$)と全体的聴取($M = 8.43$)の間に有意傾向がみられた($p = .08$)。

続いて3曲目では、楽器経験における主効果は親和(図6)において確認された($F[1, 52] = 4.29, p < .05$)。強さ(図7)においては有意傾向が確認された($F[1, 52] = 4.00, p = .05$)。しかし、その他の尺度においては確認されなかった(高揚: $F[1, 52] = 1.40, n.s.$; 軽さ: $F[1, 52] = 0.13, n.s.$; 荘重: $F[1, 52] = 0.24, n.s.$)。聴取態度についてはすべての尺度において確認されなかった(高揚: $F[1, 52] = 1.49, n.s.$; 親和: $F[1, 52] = 0.11, n.s.$; 強さ: $F[1, 52] = 2.48, n.s.$; 軽さ: $F[1, 52] = 0.17, n.s.$; 荘重: $F[1, 52] = 0.01, n.s.$)。楽器経験と聴取態度の交互作用は、軽さ(図8)において確認された($F[1, 52] = 4.32, p < .05$)。その他の尺度では確認されなかった(高揚: $F[1, 52] = 0.37, n.s.$; 親和: $F[1, 52] = 0.75, n.s.$; 強さ: $F[1, 52] = 1.74, n.s.$; 荘重: $F[1, 52] = 1.05, n.s.$)。次に、楽器経験における

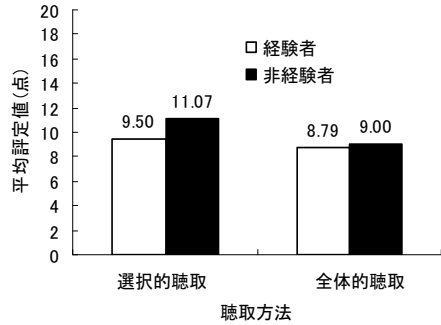


図2. 1曲目「強さ」の平均評定値

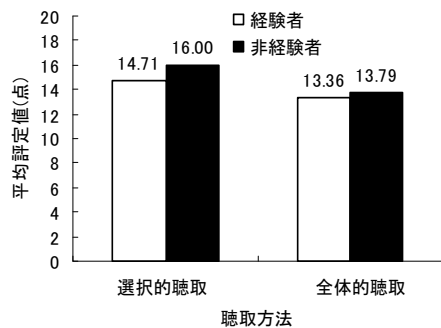


図3. 1曲目「軽さ」の平均評定値

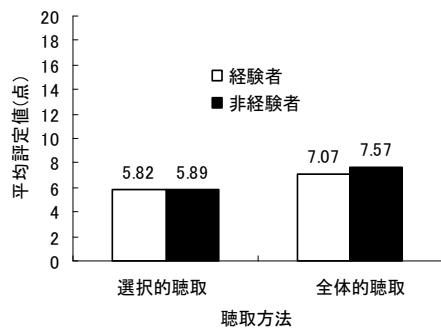


図4. 2曲目「高揚」の平均評定値

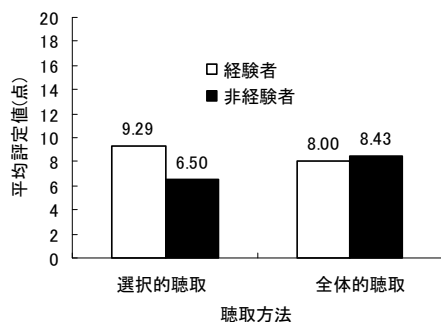


図5. 2曲目「軽さ」の平均評定値

主効果が確認された親和で、全体的聴取においての経験者($M = 5.36$)と非経験者($M = 6.93$)の間に有意な差がみられた($p < .05$)。有意傾向が確認された強さでは、全体的聴取において経験者($M = 15.29$)と非経験者($M = 12.50$)の間、非経験者においては選択的聴取($M = 14.93$)と全体的聴取($M = 12.50$)の間に有意な差がみられた(ともに $p < .05$)。音楽経験と聴取態度の交互作用がみられた軽さでは、選択的聴取において経験者($M = 9.29$)と非経験者($M = 8.00$)との間に有意差がみられた($p < .05$)。非経験者においては、選択的聴取($M = 6.50$)と全体的聴取($M = 8.43$)の間には有意傾向がみられた($p = .08$)。

最後に5曲目では、楽器経験における主効果は強さ(図9)において確認された($F[1, 52] = 9.62, p < .01$)。その他の尺度においては確認されなかった(高揚: $F[1, 52] = 0.84, n.s.$; 親和: $F[1, 52] = 0.27, n.s.$; 軽さ: $F[1, 52] = 1.76, n.s.$; 荘重: $F[1, 52] = 0.53, n.s.$)。聴取態度については、軽さ(図10)において確認された($F[1, 52] = 6.31, p < .05$)。その他の尺度においては確認されなかった(高揚: $F[1, 52] = 2.00, n.s.$; 親和: $F[1, 52] = 0.16, n.s.$; 強さ: $F[1, 52] = 0.49, n.s.$; 荘重: $F[1, 52] = 0.02, n.s.$)。楽器経験と聴取経験の交互作用については、すべての尺度において確認されなかった(高揚: $F[1, 52] = 0.84, n.s.$; 親和: $F[1, 52] = 0.00, n.s.$; 強さ: $F[1, 52] = 0.29, n.s.$; 軽さ: $F[1, 52] = 1.76, n.s.$; 荘重: $F[1, 52] = 2.33, n.s.$)。楽器経験における主効果が確認された強さにおいて、選択的聴取における経験者($M = 16.57$)と非経験者($M = 14.36$)の間に有意傾向がみられ、全体的聴取における経験者($M = 16.43$)と非経験者($M = 13.29$)の間に有意な差がみられた(順に $p = .08, p < .05$)。さらに、聴取態度で主効果が確認された軽さでは、選択的聴取において経験者($M = 9.43$)と非経験者($M = 7.36$)と

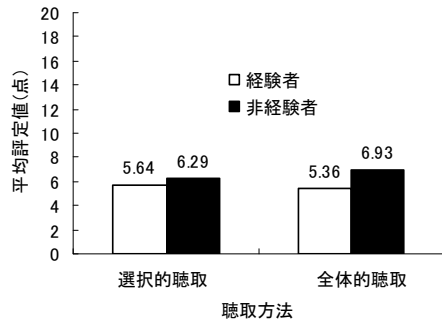


図6. 3曲目「親和」の平均評定値

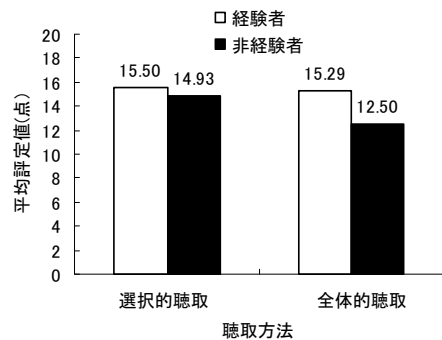


図7. 3曲目「強さ」の平均評定値

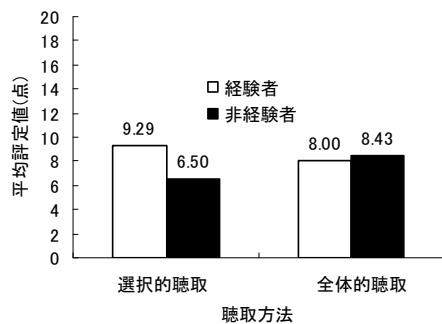


図8. 3曲目「軽さ」の平均評定値

の間に有意傾向が、非経験者において選択的聴取($M = 7.36$)と全体的聴取($M = 10.36$)の間に有意な差がみられた(順に $p = .07, p < .01$)。

最後に、選択的聴取群における確信度評定の結果について、経験者群と非経験者群とで独立したサンプルの t 検定を行った。

その結果、1曲目では経験者($M = 3.79$)と非経験者($M = 1.93$)において、選択的聴取の確信

度について有意な差がみられた($t[26] = 4.10, p < .001$)。次に2曲目では経験者($M = 3.86$)と非経験者($M = 2.50$)において、選択的聴取の確信度について有意な差がみられた($t[26] = 3.39, p < .01$)。3曲目では経験者($M = 3.36$)と非経験者($M = 2.07$)において、選択的聴取の確信度について有意な差がみられた($t[26] = 2.55, p < .05$)。5曲目では経験者($M = 3.86$)と非経験者($M = 1.93$)において、選択的聴取の確信度について有意な差がみられた($t[26] = 5.73, p < .001$)。これらの結果は図11～図14に記した。

考察

本研究では、AVSMを従属変数として用い、曲を聴取した際の実験参加者の音楽経験の有無と、聴取態度による印象の違いについて検討した。その結果、聴取態度の違いにより、非経験者ではすべての曲において曲の印象が異なることが示された。そして、音楽経験の有無では、選択的聴取と全体的聴取の両方において印象が異なることが2, 3, 5曲目の結果から示された。また、選択的聴取群における確信度の評定から、経験者は非経験者よりも選択的聴取に自信をもっていたことが示された。

まず、経験者と非経験者とで、選択的聴取後の印象に違いがみられたAVSMの尺度は、軽さ(2曲目, 3曲目および5曲目)と強さ(5曲目)であった。全体的聴取後では、親和(3曲目)および強さ(3曲目および5曲目)において違いがみられた。これらの結果から、音楽経験者と非経験者では曲を聴取する際、聴取態度に関係なく異なった印象をもつことが示された。これは、音楽経験の差によるものであると考えられる。音楽経験者は、それまでの音楽的

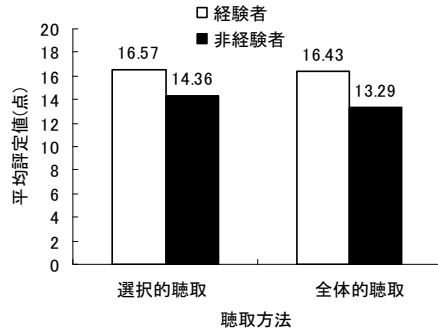


図9. 5曲目「強さ」の平均評定値

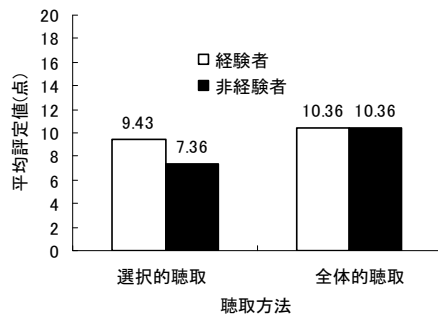


図10. 5曲目「軽さ」の平均評定値

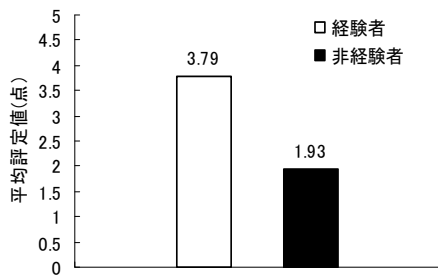


図11. 1曲目の確信度評定値

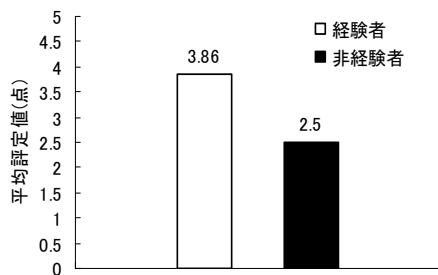


図12. 2曲目の確信度評定値

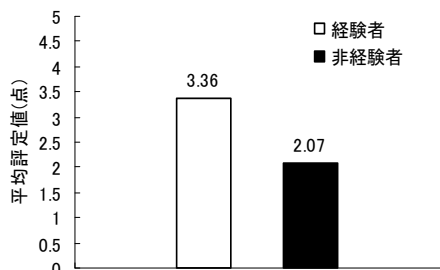


図13. 3曲目の確信度評定値

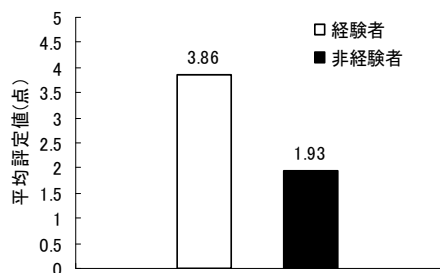


図14. 5曲目の確信度評定値

経験による知識や、楽曲を聴取する際の観点が曲の聴取の際に影響を与えていると考えられる。以上のことをふまえると、本研究で対象とした吹奏楽経験者は専門的な知識や経験をもっているために、受けた印象が非経験者と異なると考えることができる。これは、下迫・菊地(2000)において、経験者と非経験者での分析的聴取と全体的聴取とを比較したものと同様の結果である。

次に、非経験者における聴取態度間での印象の違いについて、それぞれの曲において印象に違いがあるか、あるいはその傾向がみられた。具体的には、AVSM 尺度において強さ/軽さ(1曲目)、軽さ(2曲目)、強さ/軽さ(3曲目)、軽さ(5曲目)であった。

本研究の結果は、非経験者は聴取態度の違いによって印象に違いがある可能性があることを示している。それに対し、経験者においては聴取態度の違いによる印象の違いには、それほど差がみられなかった。これは、意図して特定の楽器の音を聴取するという選択的

聴取が、非経験者にとっては特異な聴取態度であり、その特異な聴取態度の影響が反映された結果だと考えられる。反対に、経験者にとっては選択的聴取は特異な聴取態度ではなかったか、あるいは、選択的聴取が曲の印象に影響を与えるほどの負荷にならなかったためであるということを示唆している。このことは、経験者による選択的聴取時の確信度が高かったことからもうかがえる。すなわち、経験者は選択的聴取の際に選択的聴取を怠っていたわけではないのにも関わらず、選択的聴取と全体的聴取とで、曲に対してもつ印象が同様であったということを示しているであろう。これは、音楽経験を積み重ねることにより、経験を積む前と同様の処理は行いにくくなる可能性を示していると言える。さらに、経験者が全体的聴取を行う際、身に付いた音楽能力が全体的聴取の処理を妨害してしまうということがある。本来、音楽を“味わう”ことを目的として曲を聴く際には、分析的に処理しながら聴くことは、必ずしも適切な聴取方略とは考えにくい。しかし、音楽経験によって身に付いた能力が、全体的な処理を行う際にも適用されてしまうために、全体的な処理が行われなくなってしまうという可能性が考えられる。

このことは田中(1997)においても取り上げられている問題であり、経験者に身に付いた処理能力は非可逆的なものであるのか、同一個人内で使い分けが可能なものであるのかということは、これからの重要な検討課題であると言える。経験者に身に付いた処理能力の使い分けという点において考えると、本研究の結果は、意図せずに全体的聴取を行った場合にも、意図して選択的聴取を行った場合と同様の曲の印象がみられたことから、経験者は意図せずに聴取する場合、聴取目的によって処理能力を使い分けしていないのではないかという可能性が考えられる。

本研究では意図せずに楽曲を聴かせるとい

う全体的聴取をさせ、また、意識してある特定の種類の楽器の音にのみ注意して楽曲を聴かせるという選択的聴取の方法を応用して、両者の印象を比較するという手段を用いた。今後は、経験者が意図せず音楽を聴取する際、聴取目的に合わせた聴取方法を取ることができのかどうかを検討することで、この問題を明らかにすることができるであろう。

謝辞

本研究は、吉井美由貴(北星学園大学文学部 心理・応用コミュニケーション学科2009年3月卒業)の研究に基づいて行われた。氏の多大なる協力に対し、記して謝意を示す。

〔引用文献〕

- バンダイ・ミュージックエンタテインメント 編 (1998). BRASS STANDARD[CD].
- BMG JAPAN 編(1999). 亜麻色の髪乙女 ロマンティック・クラリネット[CD].
- BRAIN MUSIC 編(2003). BCL Band Classics Library2[CD].
- 土井広一(2002). 音楽聴取経験の違いが演奏評定に及ぼす影響. 広島大学大学院教育学研究科 音楽文化教育学研究紀要, 14, pp.155-168.
- fontec 編(2002). SPARTACUS SYMPHONIC TONE POEM[CD].
- 後藤靖宏(2009). メロディの音高情報の抽出能力と音楽熟達度との関係. 北星論集, 46(2), pp.55-66.
- 後藤靖宏(2017). 音楽熟達度とリズムの選択的聴取能力との関係. 北星論集, 54(2), pp.11-25.
- 佼成出版社 編(1995). Olympica[CD].
- 松本じゅん子・小杉大輔・石田開(2001). 気分による音楽の感情価認知の違い. 日本教育心理学会総会発表論文集, 43, p.139.
- MEISTER MUSIC 編(2002). パリジェンヌ風に [CD].
- Mitropa Music 編(2002). Blue Horizons[CD].
- 大浦容子(1996). 熟達と評価的発達—音楽の領域での検討—. 教育心理学研究, 44, pp.136-

144.

- 下迫晴加・菊池正(2000). 分析的聴取が旋律の印象に及ぼす影響. 日本心理学会第64回大会発表論文集, p.582.
- SUMMIT RECORDS 編(2000). PORTRAIT OF AN ARTIST[CD].
- 田中吉史(1994). 音程の分類課題における反応の個人差について. 日本心理学会第58回大会発表論文集, p.727.
- 田中吉史(1996). 音程の分類課題における反応の個人差について(2). 日本心理学会第60回大会発表論文集, p.682.
- 田中吉史(1997). 音楽認知における全体的処理と分析的処理. 東京都立大学人文科学研究科人文学報, 278, pp.109-121.
- 谷口高士(1995). 音楽作品の感情価測定尺度の作成および多面的感情状態尺度との関連の検討. 心理学研究, 65, pp.463-470.
- UNIVERSAL MUSIC 編(2004). THE LORD OF THE RINGS[CD].
- ワーナーミュージック・ジャパン 編(1998). The Miracle Best[CD].
- ヤマハ吹奏楽団 編(1993). ヤマハ吹奏楽団 全日本吹奏楽コンクール5年連続金賞の軌跡[CD].

